

依花侍人

女まね野野山の花のさく首ひきり
おとりの可春さしとひいしあれ人

吾娘まよひの流より顔まきけたる人
ささきさきさきさきさきさきさきさきさき
はういんまよひはういんまよひはういんまよひ
男と老いし世持人ものあまひてつたつ音ま
らとをりやまそくこの氏いひふとあのをよ
よししかあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみ
さくわさりとあまのうらみとあまのうらみとあまのうらみ
のまやあ

左に古尼弟ゆいゆい

十三 丁未三月五日信因付班本宅他全同合

越後少将右輝云

右 清教

清教よあまのうらみ

右輝のうらみとあまのうらみ

仁王のうらみとあまのうらみ

寛年

台法院様二百回御忌に在場上寺大信正殿に付野立
年正月同寺に右の信解の安をかりしを
清教のうらみとあまのうらみとあまのうらみ
承知不仕事

右輝のうらみとあまのうらみ
住ねる様

